

呼ばれる墓制がある。これは九州北西部の沿岸に多く分布し、朝鮮半島の無文土器文化の影響がうかがわれる墓である。

四 クニの発生と展開

人類の歴史で、農耕社会が始まり比較的安定した食糧生産が実現すると、余剰生産物が蓄積されてくる。人はこれを奪取するために争うことが常であった。弥生時代の社会においても前期の初頭から食料を保管した貯蔵穴を守るために周囲に環濠をめぐらす例が多々あり、米を求めて長い争乱の時代が続くことになる。

村から先にも簡単に述べたとおり、弥生時代の初期にクニへ小さな共同体として出発した小集落は、前期後半になると、より広範囲の水田経営を行うために大規模な拠点集落を形成する。拠点集落は大きな平野の中では数箇の距離を隔てて点在していた。中期以降、このような拠点集落のうち強力な集落は周辺地域の集落を統合していき、ついにはその平野全域に強い影響力を及ぼすこととなる。こうして地域ごとに利害を共有する「クニ」と呼ばれる社会集団が誕生する。クニを統括する首長は地域内の各集落に所属する一般の人々から、しだいにかけ離れた存在へと変貌していく。

集落の統合は政治的な手段により平和裏に進められることもあっただろうが、防衛的な環濠集落が存在することをみても武

力によって達成される場合も多かったことが分かる。

この時期の埋葬施設からは矢じりや剣の切先が出土したり、戦闘によって骨格の一部を損傷した人骨、更に頭部がない人骨が発見される場合さえある（写真2-7）。

紀元後八二年前後に後漢の班固が前漢の歴史を記した『漢書地理誌』では、紀元前一世紀の列島の状況について「夫れ楽浪海中に倭人有り、分かれて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云ふ」とある。中期後半の時期にこれらのクニは平野を単位として経済的に独立し、朝鮮半島の楽浪郡を通じて漢と交渉をもっていたことが分かる。

倭国大乱と卑弥呼

四三一年ころ南朝の宋の范曄の撰になる『後漢書東夷伝』では後期の状況が分かる。それによると「桓・霊の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主無し」と伝えられており、後漢の十一代桓帝・十二代靈帝が在位中の二世紀後半の時期、列島では各クニの間で争



写真2-7 頭部のない人骨（筑紫野市教育委員会所蔵）

乱が激化し、盟主となるクニが現れなかった。

その後、『魏志倭人伝』では「其の国、本亦男子を以って王と為し、住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為し、名づけて卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑わす。……卑弥呼死するを以って大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。」と記録されている。倭国の大乱の中で三世紀前半に共立された邪馬台国の卑弥呼によって倭国の争乱は一時的に終結する。この時期の列島内のクニは対馬国・一支国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国・投馬国・邪馬台国など三〇余りであり、紀元前一世紀の段階からクニの統合が進んでいたことが分かる。これらのクニグニは現在、対馬国が対馬、一支国が吉岐、末盧国が唐津平野、伊都国が糸島平野、奴国が福岡平野、不弥国が嘉穂盆地など、北部九州の各地に比定されている(図2-47)。

卑弥呼の死後についても『魏志倭人伝』で語られている。卑弥呼の葬儀の後、男王が立ったが人々は心服せず、殺し合いが続き、一〇〇人以上の死者が出た。そこで卑弥呼の親族の娘壹与(台与)が立てられ、十三歳で王となり、再び倭国は安定した。卑弥呼が没した時期は三世紀の半ばから後半と考えられる。卑弥呼の墓は「径百余歩」の「冢」と記録されており、大きな墳丘墓であったことが分かる。前方後円墳に象徴される古墳時代は目前に迫っていたのである。

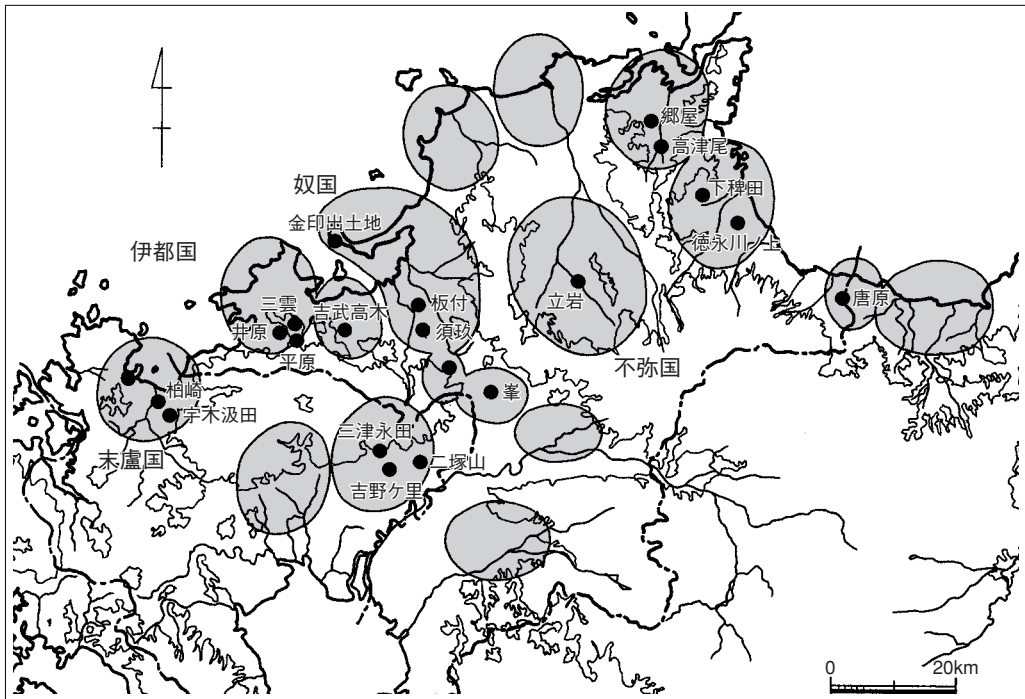


図2-47 北部九州のクニグニ